



㊦口を大きく開けて発声練習。桂文之助さん（手前）も10年近く稽古を続けている㊦床本を手に指導に熱がこもる豊竹英大夫さん（左）。受講生は竹沢団吾さん（奥）の三味線で浄瑠璃を語る—いずれも大阪市浪速区で

初代竹本義太夫（1651～1714年）によって大坂で生まれた浄瑠璃・義太夫節。太夫（語り手）の腹からの発声と重厚な響きの三味線で、文楽の物語世界を描き出す。文楽の太夫、豊竹英大夫さんは約15年前から、素人を対象にした義太夫節の教室を開いている。昔は愛好家が多かったが、今では一般には縁遠い存在。教室をのぞくと、300年以上も変わらず人情を語り続けてきた義太夫節に魅せられた人たちの力強い声が聞こえてきた。【花牟礼紀仁、写真も】



# 浄瑠璃・義太夫節

（大阪市）

## 上手も下手も 腹から人情

元気もらった!

「腹から声を出すことが健康にもいいので、発声を教えてほしい、というのが最初でした」と英大夫さん。親交のあった落語家、桂吉朝さん（2005年死去）ら有志が集まって約15年前に教室が始まった。やがて教室は複数になり、今では大阪市のカルチャーセンターなどで毎月3回、開講している。受講生は30～70代の社会人を中心に約50人を数える。英大夫さんは「全体的にレベルが上がってきている。プロでも難しい所で、苦勞してやっと克服する生徒さんを見ていると、僕も思わず涙が出ます」。落語には「寝床」「軒付け」など、浄瑠璃が登場す